

高年初産婦に関する文献研究

— 心理面への看護ケアに焦点をあてて —

里村志穂¹⁾・山内葉月²⁾

Literature Review of Elderly Primipara

— with a Special Reference to the Mental Nursing-care —

Shiho Satomura¹⁾・Hazuki Yamauchi²⁾

Abstract :

Background : In these years the proportion of elderly primipara in Japan is on the increase. The advanced age of primipara is considered to be one of the physically high-risk factors, and the risk is often discussed. It is predicted that elderly primipara in physically high-risk condition may worry about their health. However, mental nursing-care focused on the uneasiness of elderly primipara seems to be less discussed. It is, thus, important to discuss the issues of mental nursing-care for elderly primipara in order to encourage their initiative and to enhance satisfaction of their childbearing.

Purpose and Objectives : The aim of the study was to clarify the future issues of mental nursing-care for elderly primipara by conducting literature searches and discussion in order to contribute to enhancing both initiative and satisfaction of their childbearing.

Methodology : Method of the study was literature research. In order to discuss the future issues of mental nursing-care for elderly primipara we searched bibliography concerning elderly primipara.

Results : Many documents written about elderly primipara mainly explained physically high-risk factor and obstetrical diseases, while there were few literatures focusing on the mental nursing-care for elderly primipara. In the small number of nurse/midwife literatures, there were some descriptions about increase trend of uneasiness due to woman's advanced age. There were few reports of the relevant factors and backgrounds of the uneasiness of elderly primipara which were conducted by researcher's independent analysis.

Conclusions : The survey of the literatures suggested as an issue in the future the necessity of implementing research to disclose the factors constituting the uneasiness of elderly primipara. It will make the mental nursing-care for them satisfactory.

Key words : elderly primipara, mental side, uneasiness, nursing care

1) 熊本大学大学院保健学教育部保健学専攻修士課程

2) 熊本大学大学院保健学教育部

I. 緒言

近年、我が国では、女性の高学歴化や雇用労働者の増加などを背景とした少子化及び出産年齢の高齢化が問題視されている。人口動態統計¹⁾による2007年の合計特殊出生率は1.34と、2005年の1.26よりやや上昇してはいるが、少子化の改善にはほど遠い数値である。合計特殊出生率が低いことは、出産が女性にとってライフサイクルの中で1回または2回という、数少ない貴重な体験となっていることをも意味している。

出産の高齢化により高年初産婦の割合は増加傾向にあり、今後ますます増加すると予測される。母体が高齢であることはハイリスクの一因とされ、高齢妊娠・出産の身体的リスクへの対応に関しては論じられることが多い。しかし、身体的リスクを抱えた高年初産婦の不安傾向は度々指摘されるが、心理面へのケアに関して詳しく論じたものはあまりみられない。

そこで、本研究では、高年初産婦に関する文献を検討することにより、高年初産婦の心理面に対する看護ケアの今後の課題について検討した。

II. 研究目的

高年初産婦の出産の主体性と満足度向上に資するために、文献を検索し検討することにより、心理面に対する看護ケアの今後の課題について検討する。

III. 研究方法

1. 文献研究

1) 文献検索方法

(1) 検索対象文献

国内及び国外の高年初産婦に関する文献について検索し検討した(表1)。

学術論文については、国内では、『医学中央雑誌』、『最新看護索引』、『CiNii』、『Google Scholar』のデータベースにより、「高年初産婦」、「高齢初産婦」の用語を用いて検索した。タイトルに「高年初産婦」、「高齢初産婦」、または、それらを示していると判断される用語で表現されている文献も検討の対象とした。

国外では『OvidSP』、『PubMed Central』、『Google Scholar』、『SCOPUS』のデータベースから英語論文を“elderly primipara”、“elderly primigravida”の用語を用いて検索した。国内同様、タイトルに「elderly primipara」、「elderly primigravida」、または、それらを示していると判断される用語で表現されている文献も検討の対象とした。

看護学・助産学系のテキスト類を含む図書については、国内の文献を検索対象とした。熊本大学OPACで「高年初産婦」、「高齢初産婦」の用語を用いて検索し、併せて国内出版のテキスト類について検索した。

(2) 検索対象期間

検索対象とする文献の発表期間を1992～2008年とした。これは、日本産科婦人科学会が1992年

表1 国内外の文献検索データベース

	学術論文データベース	図書類データベース	看護学・助産学テキスト類
国内	医学中央雑誌 最新看護索引 CiNii Google Scholar	熊本大学OPAC	テキスト類
国外	OvidSP PubMed Central Google Scholar SCOPUS		

に、それまで30歳以上としていた高年初産婦の定義を、周産期母児管理の進歩、改善によって産科的異常の発生頻度が減少したとして「35歳以上の初産婦を高年初産婦とする」と定義した²⁾ ことを受けたものである。2008年については国内の学術論文は6月時点、国外の学術論文は10月時点におけるものを対象とした。

看護学・助産学系のテキスト類を含む図書については、2008年6月時点におけるものを対象とした。

2) 用語の定義

(1) 高年初産婦

高年初産婦とは、日本産科婦人科学会の定義に基づく35歳以上の初産婦である。高年初産婦は、軟産道強靱などによる分娩障害、染色体異常児などの頻度が高まるという理由で、要注意妊婦という意味での名称である³⁾。

なお、文献によっては高齢初産婦、高年齢初産婦という用語を使用している場合があり、文献の内容から日本産科婦人科学会が定義する高年初産婦と同様に扱われているものと判断して、検討の対象とした。

(2) 看護ケア

看護ケアとは、日本看護協会の用語解説に基づき、主に看護職の行為を本質的に捉えようとするときに用いられる、看護の専門的サービスのエッセンスあるいは看護業務や看護実践の中核部分を表すものをいう。ケアは同義語として用いられる。また、看護とは、人々の生活の中で営まれるケア、すなわち家庭や近隣における

乳幼児、傷病者、高齢者や虚弱者等への世話等を含むものをいう⁴⁾。

3) 分析方法

高年初産婦に関する学術論文を、国内及び国外のそれぞれで発表の年毎に整理し、文献の数の面から発表数の推移について分析した。

つぎに、文献の内容の面から、国内及び国外の学術論文のなかから高年初産婦の心理面を扱った文献を抽出、検索し、記述内容について分析した。

国内の看護学・助産学系のテキスト類を含む図書のなかから高年初産婦及びその心理面を扱ったものを抽出し、記述内容について分析した。

IV. 結果

高年初産婦に関して1992年から2008年にかけて発表された国内及び国外の学術論文数の推移を図1に示した(図1)。

1. 国内文献について

学術論文の数についてみると、国内における総数は36件であった(図1)。発表年別の件数をみると、1993年及び、1996年、1997年に6件と最も多く、1992年及び、1994年、2004年がこれに続いていた。

学術論文の記述内容についてみると、36件のうち高年初産婦の心理面を主に扱っている論文は7件⁵⁻¹⁰⁾であった。これらの他は、高年初産婦を統計的側面から考察した論文や産科的リスク、高年初産婦の管理、合併症などとの関連について記述

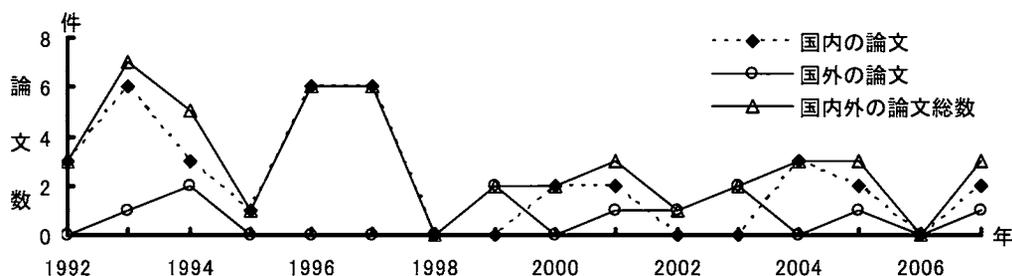


図1 国内外の学術論文件数

注1) 1992~2007年のグラフ(2008年は除く)

表2 高年初産婦の心理面を扱った国内の看護学・助産学系学術論文の概要

研究者 研究年	研究目的・方法	対象	内容
西田ら ⁵⁾ 1993	高年初産婦の妊娠・分娩状況、及び満足度に影響する因子を分析し援助の方法について考察。 質問紙法	高年初産婦11名	・妊娠・分娩を満足度の高い体験にするためには、妊婦のもつ理想と現実の格差を小さくする。 ・援助のポイント：妊娠中に妊娠像を明確にし、妊娠・分娩に対する理想や考えを把握する。分娩体験を振り返り、マイナスの因子を調整する。退院後の個々の生活に合わせ、自己対処の方法を見いだす。
近藤ら ⁶⁾ 1993	助産技術学実習における実習環境の特性を明らかにする目的で、高年初産における年齢階級別産科異常の頻度を調査。	30歳以上の高年初産婦326名	35歳以上に頻度が高い帝王切開に対して、出産体験をネガティブなものと捉えないための出産後のサポートの必要性。
安藤 ⁷⁾ 1996	出生前診断における看護について考察することを目的に、妊娠期のプロセスにおける高齢初産婦の胎児異常に対する不安と対処の実態を、羊水検査との関係から分析。 面接法	高齢初産婦42名	多様な生活経験や価値観に適した具体的な援助が必要。 胎児異常の不安を増大させないためには、出生前診断に対する説明や知識の普及が必要。
田中ら ⁸⁾ 1997	高齢初産婦産後電話訪問事業の在り方の基礎資料とするための効果測定。 電話訪問、質問紙法	30歳以上の初産婦64名	産後の漠然とした不安に対して、電話訪問による予防の可能性を推測。
杉原 ⁹⁾ 1997	高年初産婦の現状とその問題点を文献から検討し、看護の方針について考察。 文献検討	国内外の文献	高年初産婦の実態を把握し、身体的側面、精神・社会的側面に合わせた看護が必要。 高年初産婦に不安を与えず、加齢によるリスクを考慮した集中的な管理と個人にあった保健指導・援助が必要。
直田ら ¹⁰⁾ 2001	高齢初産婦の妊娠への意識を中心とした実態を知る。 質問紙法	高齢初産婦48名。	高齢初産婦は、妊娠・分娩への不安を増強させている可能性が高い。また、挙児希望の意識が強い。
土居ら ¹¹⁾ 2005	高齢初産婦の入院生活に対するニーズを明確にする。 質問紙法	高齢初産婦9名	高齢であることに漠然とした不安を抱える高齢初産婦に対し、前向きになれるよう関わる必要がある。医療者の対応や達成感の有無などに出産の印象は左右される。ケアは、専門的な対応が評価され、やさしさや安心感を持ち精神的に支える姿勢が求められる。年齢的な配慮を求めており、心身の変化に沿った個別的なケアが望まれる。

注1) 1992～2008年6月時点のデータである。

注2) 高年初産婦他の表現については、著者の記述に従った。

したもの等であった。

高年初産婦の心理面を扱った論文7件⁵⁻¹¹⁾について、各論文における研究目的・方法、対象者及び記述の概要を、発表年次順に表2に示した(表2)。併せて、各論文における高年初産婦の心理面に関する記述の概要を、以下のように整理した。

西田ら⁵⁾は、妊娠・分娩体験における妊産婦の満足度に焦点を当て、妊婦のもつ理想と現実の格差を小さくすることの重要性と援助のポイントについて述べた。

近藤ら⁶⁾は、35歳以上において頻度が高い帝王切開術による分娩では、出産体験をネガティブにとらえないための産後サポートの必要性を述べた。

安藤⁷⁾は、高齢初産婦では胎児異常についての知識不足から不安が増大する可能性等について

あげ、出生前診断に対する説明や知識普及の必要性を述べた。

田中ら⁸⁾は、高齢初産婦の産後の漠然とした不安に対して、電話訪問による不安予防の可能性について述べた。

杉原⁹⁾は、高年初産婦の実態を把握した上で、身体的側面、精神・社会的側面から看護のあり方を考える必要性について述べた。

直田ら¹⁰⁾は、高齢初産婦は挙児希望の意識が強く、また、高齢であるというこだわりから妊娠・分娩への不安を増強させている可能性が強いと述べた。

土居ら¹¹⁾は、高齢であることに漠然とした不安を抱える高齢初産婦に対し、高齢であることを問題とせず、合併症に配慮し、前向きになれるような関わりの必要性を述べた。

表3 高年初産婦を扱った国内の看護学・助産学系のテキスト類・図書の記述概要

	テキスト類・図書名	発行年	内容
テ キ ス ト 類	母性看護学 1. 妊娠・分娩 ¹⁵⁾	1994	高年初産婦の定義
	新版 テキスト母性看護Ⅱ ¹⁶⁾	2005	高年初産婦の定義 高年初産婦の看護。分娩時の疲労、焦り、不安。陣痛発作を強く感じ、帝王切開を望んだり、家人をまきこむパニックに陥る可能性を理解した看護が必要。不安、緊張を軽減させるための援助。母親役割獲得への援助。軟産道の異常。
	助産学講座6 助産診断・技術学Ⅱ [1] 妊娠期 ¹⁷⁾	2007	高年初産婦の定義。計画的な育児の遅延、長い不妊症後の妊娠、避妊の失敗などによりケアが異なる。生活設計の支援。高年妊娠の産科異常。染色体異常児に対する不安。出生前診断の希望に配慮、意思決定の支援。
	助産学講座7 助産診断・技術学Ⅱ [2] 分娩期・産褥期 ¹⁸⁾	2007	高年初産婦の定義
	系統看護学講座 専門25 母性看護学2 ¹⁹⁾	2008	高年初産婦の定義 高年妊婦の看護。初産婦のハイリスク要因、妊娠期・分娩期・産褥期の異常。個々の状況をふまえた保健指導が重要。 先天異常についての不安。染色体異常や出生前診断などの情報提供、夫婦の意思決定への援助。
	新体系 看護学全書 第33巻 母性看護学② 妊婦・産婦・褥婦・新生児の看護 ²⁰⁾	2008	高年初産婦の定義。分娩経過、処置。 高齢妊婦の看護。高齢の初産婦の分娩時の異常。先天異常児の頻度が高くなる。流早産や妊娠高血圧症候群の予防。高齢による不安や恐れ。児の健康への期待。個別に心理的援助。妊娠・分娩・産褥経過、育児などの予期的指導と正しい知識。高齢出産の不安や恐怖を軽減。
	母子看護学 母性看護学 [第2版] ²¹⁾	2008	高年初産の定義。40代では胎児の染色体異常や母体の合併症が増加、生殖年齢の終わりに近づく。
図 書	図説 妊産婦の保健・医療ガイド ²²⁾	1995	高年初産婦の定義。高年齢の妊婦では、母体には流・早産、妊娠中毒症などが増し、児には染色体異常、低出生体重児の頻度が高い。難産、胎児の異常(奇形)に対する心配・不安。背景を考え、身体的・精神的の両面に思慮深く対処。管理。
	Clinical Nursing Guide 13 母性 ²³⁾	1995	高年初産婦の定義。高年齢の問題点、分娩中や胎児、新生児の問題。妊婦の強い不安に対する精神的支援の必要性。 高年齢の看護のポイント：妊婦の背景、不安傾向への対処、病態把握、合併症予防、異常分娩への備え、体力の回復、育児指導、自信を持たせる。
	新図説臨床看護シリーズ 第12巻 母性看護(含婦人科) ²⁴⁾	1997	高年初産婦の定義
	看護観察のキーポイントシリーズ [改訂版]母性Ⅰ ²⁵⁾	2002	高年初産婦の定義。妊娠中毒症、流早産、周産期死亡、分娩第3期異常出血、帝王切開分娩の頻度が高く、染色体異常、奇形の発生が増加。
	助産師・看護師必携 産褥・退院支援ガイドブック ²⁶⁾	2003	高年初産婦の定義。 高齢出産の現状。援助の基本：人生観・価値観がある。リスクの有無。個別性の把握。育児への自信。母親自身の持つ力。母親役割獲得過程：年齢が高くなるほど母親役割への適応や満足度が高くなる傾向。母親自身が判断できるよう知識や方法を提供。サポート体制。家族計画。
	今日の助産 マタニティサイクルの 助産診断・実践課程 ²⁷⁾	2003	高年初産婦の定義。流産にともなう不安。微弱陣痛の危険性。過強陣痛の危険性：分娩に対する強い不安、恐怖による子宮筋の興奮性亢進の危険性。軟産道強靭にともなう退行性変化逸脱の危険性。乳汁分泌量が低下する傾向。

注1) 1992～2008年6月時点のデータである。

注2) 高年初産婦他の表現については、テキスト類、図書の記述に従った。

2. 国外文献について

国外の高年初産婦に関する学術論文の総数は2008年までに12件であった(図1)。論文数を発表年別でみても、1994年、1999年、2003年にそれぞれ2件と極めて少数であった。

記述内容についてみると、12件のうち高年初産婦の心理面を主に扱っている論文は3件で、母親役割の獲得過程や地域でのケアの必要性、夫と家族の支援の重要性などについて記述したものであ

た¹²⁻¹⁴⁾。これらの他は、高年初産婦を統計的側面から考察した論文や産科的リスク、周産期の転帰などとの関連から記述したもの等であった。

3. 看護学・助産学系のテキスト類及び図書について

2008年6月時点において、高年初産婦に関する記述のある国内の看護学・助産学系のテキスト類は7件¹⁵⁻²¹⁾、図書は6件²²⁻²⁷⁾、合計13件であった

(表3)。

これら13件のうち高年初産婦の心理面及び看護ケアに関して記述したものはテキスト類で4件^{16, 17, 19, 20)}、図書で4件^{22, 23, 26, 27)}、合計8件であった。

この8件における記述内容についてはテキスト類と図書類で大差は認められず、その概要は大体以下のようなものであった。高年初産婦の妊娠・出産は年齢が高くなるほど母親役割への適応や満足感が高くなるという傾向を指摘した記述や、高齢であることから妊娠・分娩に関する産科異常、胎児異常、育児に関する不安傾向が強いことを指摘した記述等であった。また、看護ケアに関しては、高年初産婦の背景を理解・考慮した身体的・精神的・個別的なケアの必要性についての記述等であった。

13件の残り5件のうちの2件^{21, 25)}は、高年妊娠をハイリスク・異常妊娠・分娩との関連で記述したものであった。また、残りの3件^{15, 18, 24)}は、高年初産婦の定義を説明したものであった。

V. 考 察

出産の高齢化は国内外で指摘²⁸⁻³⁰⁾されており、高年初産婦の妊娠・出産及び胎児に関する産科的リスクへの対応は極めて重大な課題である。また、高年初産婦の出産の主体性と満足度向上を重視する看護ケアの視点から、身体的リスクに伴って推測される妊産婦の心理的不安感への対応は看過できない重要な課題である。

我々は今回、1992年から2008年に渡る過去約16年間に発表された高年初産婦に関する国内及び国外の文献を検索し、心理面に対する看護ケアの視点から分析・考察を試みた。

文献検索の結果、高年初産婦に関する学術論文は国外よりも国内において多く見出すことができた。国内学術論文の発表年次別の推移をみると、図1に示すように発表数が有る程度多い年は数回のピークとなって表れている。しかし、長期的に

見ても、国内外で出産の高齢化が指摘されている割には、高年初産婦に関する学術論文発表が活発である印象を受けることはできなかった。

学術論文の内容に関しては、国内外ともに産科的異常に関するものが多く、高年初産婦の心理面に焦点を当てた論文は少ないことが明らかになった。

高年初産婦の心理面に触れていた国内論文7件⁵⁻¹¹⁾は、高齢であることによる漠然とした不安、胎児異常に関する不安、高齢であることにより不安が増強すること等について述べていた。看護ケアに関しては、高年初産婦の背景及び妊産褥期のリスクを重視し、多様な生活経験や価値観を考慮した個別的で具体的なケアの必要性を挙げたものや、妊産婦自身のセルフケアの必要性を挙げたものであった。しかし、心理面を扱った論文では、高年初産婦の心理を身体的リスクから推測して述べたもの、あるいは他の研究項目との関連で述べたものが多く、研究者独自の調査結果に基づき、不安要因に焦点を当てて系統的に明らかにした文献は殆どみられなかった。

国内の看護学・助産学系テキスト類及び図書で、高年初産婦の心理面について記述したものは8件であった^{16, 17, 19, 20, 22, 23, 26, 27)}。これらは、高年初産婦のもつ心理的傾向を、不安・心配・焦り・恐怖として記述しており、心理面に対するケアについて詳述したものは殆どみられなかった。このような実態は、これから看護師、助産師となる学生達のテキスト類において、今後ますます必要と考えられる高年初産婦のケアに関する記述を充実させる必要性を示唆していた。

新道ら³¹⁾は、妊婦は妊娠を喜ぶ気持ちのいっぽうでは、当惑や不安の感情をも経験することが多いと述べている。高年初産婦の場合は、高齢のために出産に対してより大きなストレスを感じ、不安を増強する傾向にあることは容易に推測できる。したがって、少子化社会の中で高年初産婦が、数少なく貴重な出産を、主体性を持って安心・満足して体験できるためには、不安の要因を明らか

にし、心理面に対する看護ケアを充実することが必要である。

今回の結果は、高年初産婦の増加が予測される今日、心理面に焦点を当てた研究の必要性を示唆していた。

VI. まとめ

高年初産婦に関して過去約16年間の文献を検索し、検討した。考察の結果を以下のようにまとめた。

1. 高年初産婦に関する文献は、国内外ともに産科的異常及びハイリスクを扱ったものが多く、心理面に対する看護ケアを扱った文献は少なかった。
2. 高年初産婦において不安が増強される傾向は指摘されていたが、不安要因についてその根拠を系統的に分析した文献は殆どみられなかった。
3. 今後、高年初産婦の不安に関する要因を探究し、心理面への看護ケアを充実させる課題が明らかになった。

VII. おわりに

高年初産婦が抱える不安については、推測はできても要因について明らかにすることは決して容易ではないと考える。生殖医療の目覚ましい発展も、高年初産婦の心理面への看護ケアにおいて、今後新たな課題を持ち込むことが予測される。医学の進歩や女性のライフスタイルに対する考え方の変遷など、環境の変化に対応した高年初産婦の心理面への看護ケアが重要であると考えられる。

引用文献

- 1) 厚生労働省：平成19年 人口動態統計月報年計（概数）の概況，
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai07/kekka2.html>
- 2) 第44回日本産科婦人科学会総会記事，1992.
http://ci.nii.ac.jp/vol_issue/nels/AN00190060/ISS0000137144_jp.html
- 3) 社団法人日本産科婦人科学会編：産科婦人科用語集・用語解説集，183，金原出版，東京，2006.
- 4) 社団法人日本看護協会：看護にかかわる主要な用語の解説 概念的定義・歴史的変遷・社会的文脈，2007.
<http://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/2007/yougokaisetu.pdf>
- 5) 西田裕子他：高年初産婦への援助 満足度の高い体験への働きかけ，北里大学病院看護部看護研究発表会集録，17：17-21，1993.
- 6) 近藤好枝他：高年初産における看護問題の検討，群馬大学医療技術短期大学部紀要，14：69-73，1993.
- 7) 安藤広子：高齢初産婦の胎児異常に対する不安と不安への対処 羊水検査との関連から，日本赤十字看護大学紀要，10：43-54，1996.
- 8) 田中満由美他：高年齢初産婦産後電話訪問事業の効果に関する検討，母性衛生，38(1)：6-11，1997.
- 9) 杉原喜代美：高年初産婦の現状と看護の方針，足利短期大学研究紀要，17：147-154，1997.
- 10) 直田幸代他：高年齢初産婦の分娩・妊娠に対する認識 滋賀県下の調査を通して，母性衛生，42(2)：316-323，2001.
- 11) 土居悦子他：高年齢初産婦の入院生活におけるニーズの検討 アンケート調査の結果から，茨城県母性衛生学会誌，25：19-25，2005.
- 12) Carolan M.: Late motherhood: the experience of parturition for first time mothers aged over 35 years. Australian journal of Midwifery: Professional Journal of the Australian College of Midwives Incorporated. 16(2) : 17-20, 2003.
- 13) Carolan M.: Maternal and child health nurses: a vital link to the community for primiparae over the age of 35. Contemporary Nurse. 18(1-2) : 133-142, 2004-2005.
- 14) Reece SM.: Social support and the early maternal experience of primiparas over 35. Maternal-Child Nursing Journal. 21(3) : 91-98, 1993.
- 15) 東野妙子他編：母性看護学 1.妊娠・分娩，150，医歯薬出版，東京，1994.
- 16) 後藤節子他編：新版 テキスト母性看護Ⅱ，212-213，241-242，名古屋大学出版会，愛知，2005.
- 17) 我部山キヨ子他編：助産学講座6 助産診断・技術学Ⅱ [1] 妊娠期，308-309，医学書院，東京，2007.
- 18) 我部山キヨ子他編：助産学講座7 助産診断・技術学Ⅱ

- [2] 分娩期・産褥期, 2, 医学書院, 東京, 2007.
- 19) 森恵美著者代表: 系統看護学講座 専門25 母性看護学 2, 146, 348-349, 医学書院, 東京, 2008.
- 20) 新道幸恵編: 新体系 看護学全書 第33巻 母性看護学② 妊婦・産婦・褥婦・新生児の看護, 270-271, 334, メヂカルフレンド社, 東京, 2008.
- 21) 氏家幸子監修: 母子看護学 母性看護学 [第2版], 58, 廣川書店, 東京, 2008.
- 22) 森巍: 図説 妊産婦の保健・医療ガイド, 302-305, 真興交 易医書出版部, 東京, 1995.
- 23) 池ノ上克編: Clinical Nursing Guide 13 母性, 174-176, メディカ出版, 大阪, 1995.
- 24) 正津晃監修者代表: 新図説臨床看護シリーズ 第12巻 母性看護(含婦人科), 188, 学習研究社, 東京, 1997.
- 25) 宮崎和子監修: 看護観察のキーポイントシリーズ [改訂版] 母性I, 14-15, 175, 中央法規出版, 東京, 2002.
- 26) 堀内成子編: 助産師・看護師必携 産褥・退院支援ガイドブック ベリネイタルケア2003年夏季増刊, 町浦美智子, 生活全体を支援する 移行期の家族関係を支援する 若年出産・高齢出産, 214-217, メディカ出版, 大阪, 2003.
- 27) 北川真理子他編: 今日の助産—マタニティサイクルの助産 診断・実践過程, 116-117, 366-367, 392-393, 722-723, 737-738, 南江堂, 東京, 2003.
- 28) 武谷雄二編: 別冊・医学のあゆみ リプロダクティブ・ヘルス, 星信彦他, 高齢出産, 49-56, 医歯薬出版, 東京, 1997.
- 29) 厚生労働省大臣官房国際課: 「2003~2004年 海外情勢報告」 諸外国における少子化の動向と次世代育成支援策(要約版), <http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusho/kaigai/04/index.html>
- 30) 都市再生研究所: 少子社会に関する論点整理と意識分析 概要版, 平成16年度 少子社会対応委員会 調査報告書, <http://www.toshisaisei.jp/pdf/low-birthrate16.pdf>
- 31) 新道幸恵他: 母性の心理社会的側面と看護ケア, 2, 医学書院, 東京, 2000.